

## 1. 略歴

1979年3月	東京芸術大学美術学部芸術学科卒業
1981年3月	東京芸術大学大学院美術研究科芸術学専攻修士課程中途退学
1981年4月	兵庫県立近代美術館学芸員
1995年4月	同美術館学芸課長
1997年4月	東京大学総合研究博物館助教授
2000年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2001年4月	国立民族学博物館助教授併任（～2003年4月）
2004年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

文化資源学

### b 研究課題

幕末・明治期の造形表現の形成と変容と展開を、従来の美術史学の枠組みを離れて追跡している。既存領域である美術に隣接する写真、芸能、祭礼、見世物、民衆娯楽の領域に目を向けるとともに、それらの表現活動と社会の関係の解明にも取り組んでいる。評価されないものの実態と、それを評価しない仕組みの双方をも明らかにしたい。後者は当時の文化政策の研究へと展開するはずだ。開設時より関わった文化資源学専攻における新たな研究領域の開拓と構築に対し、こうした歴史的視点の導入を積極的に進めてきた。

### c 概要と自己評価

近年の研究に、以下の三本の柱を立てている。第1に「展示」、第2に「文化財」、第3に「近代の文化政策」である。

第1の展示研究は、狭義の博物館学にとらわれずに、広く何らかの物品や問題が展示されている環境を対象とする。主に、戦争の記憶（戦意昂揚や慰霊）を伝える展示、彫刻の屋外展示、動物展示（見世物や動物園の歴史と課題）を重点的に研究している。とりわけ動物展示に関しては、展示状況のみならず、経営実態を含めて現場をよく調査するとともに、2011年より日本動物園水族館協会の広報戦略会議のメンバーとして、さらに環境省が2013-2015年度に設置した動植物園等公的機能推進方策のあり方検討会の委員として、動物園水族館法の制定を視野に入れながら実践的な活動も展開しつつある。同協会が公開シンポジウム「いのちの博物館の実現にむけて—消えていいのか、日本の動物園と水族館」を7回開催、そのすべてのコーディネーターを務めた。さらに2015年度より同協会の顧問に就任した。社会的にきわめて有意義な活動と認識している。ここで考えたことは東京大学出版会の雑誌『UP』に「動物園巡礼」と題して連載し、広く問題提起している。文学部に開設されている博物館学芸員課程講座において、その視野に動物園と水族館をとらえることも有意義だと考える。

第2の文化財研究は、文化領域における価値評価を問題にし、これを歴史的な視野の中でとらえてきた。宝物・国宝・文化財・文化遺産・文化資源をキーワードに、文化財や芸術作品を相対化し、文化資源学の展望を示したい。まずは講義を重ね、問題を整理し、近く著書の刊行で成果を示す予定である。

第3の文化政策研究に関しては、2013年秋にロンドンの大英博物館で開催された「春画展」に協力・関与し、その後同展の日本開催が難航したことを受けて、日本社会と春画展示を考える春画展示研究会を文化資源学会に開設した。2014-2015年度に7回の研究会を開催し、最終回は公開フォーラムとした。その成果は、『文化資源学』第12号（2014年）、第13号（2015年）で公表した。問題を春画展にとどめず、社会が性表現をどのように管理してきたのかを問う文化政策研究とした。

以上の三本の柱を研究軸とすることで、学内での教育と学外への発信とがうまく噛み合い出した。トータルとして、数年内には、19世紀の日本文化の知られざる一面を明らかにできると考えている。

### d 主要業績

#### (1) 論考

「二十五人の渋沢栄一—銅像からゆるキャラまで」（平井雄一郎、高田知和編『記録と記憶のなかの渋沢栄一』法政大学出版局、2014）

「死者がよみがえる場所」（秋山聡、野崎敏編『人文知—死者との対話』第2巻、東京大学出版会、2014）

「開港場横浜の祭礼」（久留島浩編『描かれた行列—武士・異国・祭礼』東京大学出版会、2015）

「春画と裸体画問題」(『文化資源学』第13号、文化資源学会、2015)

「春画と明治日本」(『春画展』図録、永青文庫、春画展日本開催実行委員会、2015)

「猥褻のはじまり」(『ユリイカ』第47巻第20号、青土社、2016)

### 3. 主な社会活動

#### (1) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

静岡県立美術館第三者評価委員、2006～

横浜美術館、アドバイザー、2008～

独立行政法人国立美術館、運営委員、2009.4～

東京都写真美術館、第三者評価委員、2010～

日本動物園水族館協会、広報戦略会議委員、2011～